



男は 痛い !

國友万裕

第34回

『ロマンスボール』

1. 京都の落とし物、大阪で受け取る

京都市バスに乗った瞬間、筆入れをなくしていることに気づいた。その日、出町柳駅で降りて、ある大学の図書館に向かうとしていた時だった。「あー、どこかで落とした！」その日は荷物が多くて、リュックの上のファスナが閉じきれずに開いていたので、何かのはずみで落ちたのだろう。俺は次の停留所で市バスを降り、乗った停留所へと再び逆戻りした。道に落としたのかもしれない、バスに乗った瞬間に反動で落ちたのかもしれないと思いながら歩いて戻ったのだが道には落ちていない。誰か届けてくれたのかもしれない。近くの交番に行った。

交番のお巡りさんは本当にのんびりしていて、雰囲気は昭和レトロだった。とは言っても、時代は令和、今はネットで京都中の落とし物をすぐに検索できる。しかし、落としたばかりなので案の定届いてはいない。届を出す前に、出町柳の駅で訊いてみたらと言われ、地下への階段を下りて、電車の案内所に行った。まだ届いていなかった。再び、交番に戻って、正式に届出すと受理番号をくれた。明日以降はこの番号を電話で伝えれば、警察に届いている場合は保管されているとのことだった。

永久に出てこないかもしれないなあ。まあ、仕方がない。筆入れの中には失くして困るようなものは入っていない。それより少し前まではUSBメモリも入れていたのだが、USBをなくすと大変だからと思い、他のところに移し替えたばかりだった。あれは虫の知らせだったのだろうか。USBを失くしたりしていたらもっと不安だろうから、不幸中の幸い

だ。

あの筆入れは弟が誕生日に買ってくれたやつで、安物ではない。中には筆記具と前にこれも誕生日にある先生からいただいたコインが入っているので、失くしたくはない。しかし、もう諦めるしかないか。こういう小さなことを大きく考えて凹むのが俺の悪いところなのだ。

新しいのを買おうかとも思ったが、1週間くらいは待とうと思った。俺は強迫的性格なので、何かなくしたりするとすぐに新しいものを買ってしまう。ところが、そのあと意外に出てきたりするので損したという気持ちになることが度々なのだった。

その日、交番の人からは警察の遺失物取扱所の電話番号の他に電車や市バスの忘れ物センターの電話番号が書かれた紙をもらったので、翌日の午前中、たまたま仕事がなかったので、電車の係に電話してみた。そしたら、どうやら俺の筆入れらしいものが届いている。「見つかった場所はどこですか？」と訊くと、「出町柳です」と言われた。あ、これは間違いない！おそらく、前日電車の駅に尋ねに行った直後に届いたに違いなかった。

落とし物は、届いた翌日以降は京橋の忘れ物センターに全て集められるとのことで、俺は仕事の前に京橋に筆入れを受け取りに行ったあと、午後からの仕事に向かった。電車賃はかかったが安堵の思いだった。

俺はできる限りエネルギーを省エネしたいと思って生きている。だんだん歳はとっていくし、そうしなければ身が持たない。だから不備がないように細心の注意をしながら生きているのだが、時としてこういうことは起きる。人間だもの。機械とは訳が違っている。

ミスをするから人間。それを許さなくては！！

2. ネットが切れた3日間。

ネットの接続が1月になって頻繁に切れるようになっていた。今のルーターは、取り換えてからまだ数ヶ月しか経っていないのだが、最初から調子が悪かった。

こういう時は本当に憂鬱だ。インターネット関連の問い合わせ電話はいつだって混み合っていて、なかなか通じない。それを待っているのが面倒臭くてたまらないのだった。でも、仕方がない。この頃はLINEで問い合わせというのもあるので、これだと待ち時間は少ないからこちらを選んだ。とはいっても、パソコンは接続できない状態だからパソコンからのLINEはできない、スマホからのLINEとなる。文字を打つのが面倒くさい。適当に文にもならないような文でルーターの会社のサポートデスクにテキストした。

この頃は、先方はマニュアルをキチッと把握していて、折り目正しい返事が即座に返って来る。その後、教示に従って、接続をもう一度やり直した。どうにかつながった。よかったと胸を撫で下ろした。

ところが数時間後、また調子が悪くなり始めた。再びLINEで問い合わせるとプロバイダーの問題かもしれないと言われ、プロバイダーのサービスに電話したところ、そのルーターがどういうルーターなのかをルーターの方の会社に問い合わせしてくれとのこと。再び、ルーター会社とのチャットに戻る。どうやら、俺が使っているルーターは古い機種のようなのだ。俺は早合点して、新しいのを買おうと

決めた。Amazon で見ると 3000 円台で買える。こちらのほうが性能も良いとのことだったので、3000 円の価値はあるだろう。

早速 Amazon で注文して、翌々日の朝、新しいルーターが届き、取り換えることになった。無事繋がった。やれやれ。その日はちょうど大学のテストの採点をしていて、1 日かけて採点が終わり、成績入力もできた。あー、ホッとした。これからのんびりできるなあー。そう思っていると、夜になって、また接続が切れていることに気がついた。まあ、これも入力がひと段落したあとだったことが不幸中の幸い、しかし、なぜ、入力の後申し合わせたように切れるのか???

再びチャットに戻った。ルーターの会社の人からは、そこまで試してできないのであれば、電話会社の方に確認してもらうしかないと言われ、今度は電話会社に連絡。しかし、ここでもスムーズには進まない。結局、すったもんだした後、修理係から電話が来て、すぐに新しいレンタル機器を届けますとのことだった。それから 3 時間ほどたって、配達のおじさんがやって来て、今度こそ確実に繋がったようだった。

しかし、仕事はまだ終わらない。それまで古いルーター経由で繋いでいた機器などの再設定がうまくいかない。また日曜日の朝から電話。携帯をスピーカーにして 1 時間電話しながら、操作して、どうにかつながった。ふーっ。

今はネットがないとどうにもならない。ほんの数日、ネットの接続が上手くいかないだけでも、耐えられないような状況になる。思えば、俺は暇な時間は常に Mac の画面と向かい合っているのだった。

そもそも、新しいルーターに変えたのは、俺のマンションに勧誘の人が来て、特典があるからうちの会社のやつに乗り換えないかと言われたからだった。しかし、その人も別にネットの専門家ではないので、接続のこととかに詳しいわけじゃない。ただ、勧誘の営業の人だ。最後に俺のところに機器を届けに来たおじさんも、あの様子だと全く IT 関係ではない仕事の人だろう。

今の世の中、自分も知らんような商品を営業したり、配達したりしている人が多いのだ。自分が何をしているのかわからないという状況。一方で、サポートの人たちも、電話や LINE で会ったこともない人と話をしていく。しかも、その繋がる先が北海道だったりする。東京だと土地代がかかるから、むしろ都心からは離れたところにセンターを置いているところもあるという話はしばしば聞く。

昭和のような濃密な人間関係はなくなっている。ものの本によれば、恋愛だって、この頃の人を手頃な相手と手頃に付き合っているらしい。そういえば、昔みたいに親の反対を押し切って駆け落ちとか心中とかいう話はもはや聞かなくなった。今の子は、最初からそういう面倒くさい人とは付き合わないのだ。

こういう世の中を世知辛いという人もいるけれど、俺はそうは思わない。今の人たちは本当に優しいし、礼儀正しい。当たらず触らずに対応してくれる。それはマニュアルをのみ込んでいるだけで心からの親切ではないから問題なのだという人もいるけど、昭和の無愛想さやぶっきらぼうさに比べれば、今の方が遥かに良い。

先日、『スターウォーズ』を見にいったら、人によっては光に拒絶反応を示す人もいるか

からお気をつけくださいという貼り紙がされていた。敏感さは人によって違っているから配慮する時代となったのだ。こういう時代だとサービスを提供する側はあれこれ面倒くさいけれど、個々の個性に配慮する時代になったことは歓迎すべきことである。

3. スムーズに確定申告

1月の終わり、仕事がほぼ終わって、春休みモードになった。こういう時俺は何もすることがなくて、寝てしまう。いけないことだとわかっているけどやめられない。春休みはまた太るだろうなあ。

その日も昼からしばらく寝ようとするけど、郵便受けに源泉徴収が届いていることがわかった。まだまだ3月半ばまで確定申告は受け付けているのだが、例によって、俺の強迫症が始まった。

俺は即座にパソコンを開くと、確定申告の書類を作り始めた。俺は源泉徴収をたくさんるところからもらっているが、それは予め全てファイルに一まとめにしてある。眠いのを堪えながら、さっさと書類を作って行き、1時間ほどで書類はでき上がった。

それをプリントアウトすると、自転車を走らせて、税務署へ。税務署では、「今年から源泉徴収票、要らなくなったんですけど、提出なさいますか」と訊かれた。なぜ、要らなくなったのかよくわからない。誰かズルをする人が出るのではないか？ マイナンバーカードを登録しているから違反行為はできないのだろうか？これだけ毎年、確定申告をしても税務署のシステムまではわからない。

しかし、手続きが簡素化されたことは事実

のようで、毎年、何かの書類を忘れてたり、早とちりしたりで、手間取ることが多いのだが、今年は思いの外スムーズに申告書の提出は終わった。

終わった後、マップを使って、先日、本で紹介されていた、税務署近くの昭和レトロな喫茶店に向かった。ここの名物は、海苔トースト。初賞味である。バターと海苔の味がマッチして思いの外美味しい。申告が終わってホッとして、ささやかな幸せを感じる時間だった。

4. 苛立つ心

俺は心にゆとりがない。この頃バスに乗って移動することが多いのだが、市バスの中で席が空いているのに立っている人を見るとイライラしてしまう。席が空いている時は座ってくれなかったら通路が詰まってしまう。したがって、座ってくれと言いたくなるんだけど、頑なに座ろうとしない人がいる。

俺は人に合わせる習慣がないからこれくらいのことで心が波立ってしまう。40年近くも一人暮らししていると、他人が家にいるという状況すら鬱陶しくてたまらない。

俺はたまに埼玉にある叔母の家に遊びに行くが、トイレに行くのさえ気を遣う。トイレは一つしかないし、ちょっとでも汚したりすると悪いという気持ちがある。実家だったら、母と弟だから、ちょっとくらい汚しても構わないが、叔母となると多少距離があった。

シャワーや風呂の後も、オバや実家だと出た後、裸で歩き回ることにはできない。大学の頃、自宅生のクラスメートから、「下宿なんて

羨ましいなあ。裸で寝ることだってできるやんか」と言われたことがあった。彼は体育会系のキン肉マンだったのだが、自分の部屋であったにしても、母や妹など女性の家族から裸の姿を見られる恐れがあるから、裸でいるのは躊躇するというのが。そうだなあ。俺だって、裸ということになると母に見られるのも抵抗がある。抵抗のない男もいるだろうけど、俺は抵抗があるし、そういう男の方がむしろ多いのだ。一人暮らしだと家でさっとシャワーを浴びて、その後タオルで体を拭きながらウロウロできる。妻や子供とマンションで暮らしていたら、狭い脱衣所で家族の目を忍んで体を拭くことになるのだ。一人暮らしの自由さ、開放感は何事にも代えがたい。俺は食べ物の好き嫌いも激しいので、冷蔵庫に嫌いなものを入れられるのさえ超憂鬱なのだ。結婚なんてできる人間ではないのだ。

その一方で、1人を持って余してしまうことがあるのだ。この原稿がアップされる頃、俺は56歳になっているはずだ。56となったら、昔だったら隠居の年齢。あー、歳だなあ。しかし、俺は隠居することはできない。年金まではまだまだ先だし、年金が下りる年齢になったとしても、年金だけじゃ生活できないから働けるところまで働かなくてはならない。今、ベッドに横たわってこの原稿を書いているのだが、この年の男で、一人暮らしで、誰もいないところで1人で寝ているというのはなんとなく寂しい光景である。俺は独り言の癖があって悩んでいるが、家族と暮らしていれば、それもなくなるだろう。

これから何があるだろうと考える。確かに昔の60歳と今の60歳ではイメージが違ってくる。60代はまだ若い。母は、60過ぎてから新

しい人生が開けて、世界中を旅行することにもなった。しかし、俺にそういう展開が待っているのだろうか。おそらく、これからの俺は、仕事のチャンスも減り、体力も衰え、容姿も汚くなり、楽しいことや夢中になれることも少なくなっていくだろう。

50代半ばとなった今でもすでに何を目標にしていかわからなくて俺は路頭に迷っている。一番したいことは、若返って、スポーツマンになること。ラグビーや野球など男同士の関係をたっぷり味わうこと。ジェンダーなんかには囚われずに生きて、結婚して、普通の家庭を持つことに幸せを感じられる男になること。歌の歌詞にあった「時代遅れな男になりたい♪」とまでは行かなくていいのだが、そこそこに保守的な生活で、リベラルさも持ち合わせて生きること。俺はもうそうなることはできないから、余計にそういう人が眩しく見えるのだった。

昨年11月23日のポスターセッションで、これまで8年間続けて来た対人援助学会のセッションも終止符を打つことになった。毎年、関心を持ってくれる人もいるが、むしろ興味なさそうな顔で素通りする人の方が大勢である。この頃、男性運動に関しても諦念の思いが出て来てしまっている。世の中の人の大半はジェンダーブラインド。ジェンダーのことを話しても、困惑してしまう。わかってもらおうとするから、ますます俺はイライラしてくる。

わかってもらえなくても構わない。幸い、ジェンダーを強いられるような仕事はしていない。そう思って、いつそ忘れてしまいたい。でも、ここで忘れてしまったら、俺の人生のアイデンティティがなくなる。俺の人生はジ

ェンダーとの格闘の人生だったのだ。しみじみ、人生の早い時期にジェンダーに囚われた自分の人生が悲しくなるのだった。

5. 悲しみは食事の味わい

最近になって、千本丸太町のあるカフェに初めて行った。ここは確か数年前まではジャムを売っていた店だったと記憶している。おそらく前の人をやめられて、そこをリニューアルして、今のところを作ったのだろう。

ここでチャーハンセットを食べ、F B にあげると、ある人が、「ここ、僕も近所だからよく行きますよ」とコメント。「他にもオススメのところはないですか」とコメント返すすると、「ありますよ」と別のカフェを教えてくれた。

早速、そのカフェに行ってみると、期待していた以上に良いお店だった。年配のおばさんたちがやっているのだが、ランチセットに心がこもっている。春巻きのランチを頼んだのだが、付け合わせが栄養のバランスが考えられていて、ご飯にはシラスが振りかけられ、粕汁と温かいお茶がついてくる。文句のつけようのない満足感だった。

2月の1日には、かつて近所の行きつけのカフェで働いていた男性が現在働かれている居酒屋に行くことになった。彼とは今でもSNSでやりとりをしていて、一度行ってみたいとメッセージして、早速行くことになったのだった。カウンター席に座り、彼と話をしながら、酒はあまり飲めないので、普段が不足しがちな魚類をたっぷり食べた。素材にこだわるお店のようで、美味しい、質が高いことを感じる。

彼とは大学生の話になった。「へえ、今の子はそうなんですか」と彼から言われ、「大学生活、そんな昔じゃないだろう(笑)」と言うと、「いや、もう僕よりひとまわり年下の子が大学を卒業しているんですよ」と言われた。あー、そうか、彼ももう34歳なのだ。最初に会ったのが10年くらい前だから、俺は彼の若い頃のイメージを引きずって、いつの間にか年月が流れたことを忘れてしまっている。

彼はその間、結婚もしたのだった。そういえば、彼は独身の頃、子供が欲しいから結婚したいと言っていた。でも、まだ子供はいないみたいだ。おそらく、経済的にしんどいのかも知れない。まだまだこれから大変だろうなあー、と俺は同情を禁じえない。

俺だって、子供はつくれない。学校は公立のところで構わない、大学に行かせなくても構わないと割り切ってしまうと、子供をつくることもできるだろう。しかし、俺は悪夢のような少年時代を送っているのだから、子供を公立の学校になんてやりたくない。私立だったら、年間100万円はかかるみたいだ。小学校や中学から100万ずつというのは大変な経済的負担だ。それに俺は大学院まで行っているから、子供ができたなら大学ぐらいは行かせてあげなきゃいけない。そんな思いが湧いてくる。もう、俺は今更子供なんかつくらないから、どうでも良いのだけれど、俺はいつだって悲観的な事柄を想定して、自分には影響ないことまで悲しくなってしまうのだった。

彼は、俺が食べ歩きが好きだということを知っているのだから、俺の家の近所にイタリアンのお店ができたからそこに行ってはどうかと言われた。以前彼が働いたカフェで同僚だった女性が旦那さんと開いた店である。

翌日の昼、早速その店にランチに行った。昨日彼から、この店を紹介してもらったんだと話すと、「まあ、嬉しい。でも、私は子供が小さいからまだ居酒屋の方は行っていませんよ。まだ、店始めたばかりですしね」と言われた。彼女は俺の顔と名前を覚えてくれていた。

店には小学校くらいの男の子が遊びに来ていた。おそらくこの子が息子さんである。旦那は背の高い人で黙々と料理を作られていた。

ここもこだわりの店で、パスタ、ホカッチャ、サラダ、デザート、コーヒー付けて、ランチが2000円くらいかかる。決して安くはない。味は美味しいのだが、2000円となると毎日くるお客さんはそうはいないだろう。これでお店がやっていけるのかとまた心配になる。店には大きなエアコンがついている。暖房代はかかるんだよなー。子供も小学生じゃ、まだこれからお金もかかるし、反抗期で道に迷う可能性だって出てくるだろう。その困難も夫婦だったら乗り越えられるのだろうか。

俺の悲観癖は幾度も浮かび上がってきて、美味しい食事にペーソスを与えるのだった。まあ、いいか、こういう悲しい気持ちに浸りながら、グルメを楽しむというのも風情はあるのだ。

俺の食べ歩きについて話すと、彼女はまた別のお店を教えてくれた。次はその店だ。俺の食べ歩きの輪は広がっていく。50代後半になっても、食べる楽しみはあるのだった。これがある限り、少なくとも生きていく価値はあるだろうと思った。今の俺には友達だっただくさんいるし、幸せなのである。

6. 『ロマンズドール』(タナダユキ監督・2020)

純愛映画とアダルトグッズをドッキングさせた映画である。

ラブドールを作る工場が、乳がんなどで乳房を失った女性の人工乳房を作るためと偽ってモデルの女性を雇うことになる。その彼女と恋に落ちるラブドール製作の男の物語である。序盤はラブドールの工場という知らない世界が描かれて面白いのだが、そのあとは徐々に常套的な純愛ものとなっていく。

2人は結婚するのだが、彼(高橋一生)はその後何年も彼女(蒼井優)に自分の仕事のことを打ち明けていない。俺は結婚していないのでよくわからないが、普通の夫婦ってこんなものなのだろうか。自分の仕事先まで偽って、結婚生活を続けるってことができるものなのか。

俺はその部分が引っ掛かった。

この連載で何度も書いてきたように、俺は高校にまともに行っていない。今もそのことは俺の中で重いトラウマとして残っている。その事実を過去のこととして客観化できるようになったのは、40過ぎてからで30代くらいまではまだ生々しくて、おいそれと口にできなかった。俺が女性だけでなく、人間関係を全く紡げなかったのはそのトラウマのせいである。触れられたくない過去を持つことは本当に重いことだ。だから、誰にも触れて欲しくない秘密が人にはあるのだということは理解できる。しかし、この主人公にはその重さが感じられない。彼女の方も、彼からついに真実を打ち明けられたとき、そのことにそれほど驚く様子を見せない。そのことが他のエピソードにつながっていくわけでもない。したがって、彼が仕事を隠すことの意味が共

感できなくなってしまうている。

「隠す」といえば、蒼井優は、ギリギリまで見せておきながら、バストトップを見せようとしない。『宮本から君へ』でもそうだった。どうにか乳首だけは見せないという撮り方がされていて、逆に笑ってしまう。あそこまで見せといて、トップだけ見せないとなったら、いかにもそこを意識しているみたいで、むしろ何も見せない方がいいんじゃないのとも思ってしまう。それとも、隠せば隠すほど観客は見たくなる、人の秘密も隠されれば隠されるほど知りたくなる、それを訴えたいのだろうか。

また別の場面で、ラブドールを愛用している他の男性が、もう生身の女性とは付き合えないという一コマがちらりと挿入されていて、その辺りは共感した。俺はラブドールを持ったことはないが、女性恐怖症なので、生身の女が怖いという現代の若い男性たちの心理はよくわかるのだ。そういえば、『ラースとその彼女』『空気人形』など、21世紀になって生身の女性ではない人に惹かれる男の話は多くなってきたような気はする。

この映画の主人公もラブドールになぞらえた女性だからこそ彼女と恋愛することができる、怖がらずに付き合うことができるのだ、だから濃厚な愛が育まれたのだと解釈すればいいのかも知れない。そういえば、この映画の蒼井優は貞淑で古風そうに見えて、実はスケベ女ということになっていて、何事も受け入れてくれる聖女のような側面とセックスに関しては淫らな娼婦のような側面を併せ持っている。これはある面男性の理想とする女性像で、昔から古今東西、映画で描かれてきた女性類型なのだった。

今の若い男たちは優しい。生身の人と恋愛して、自分も相手も傷つけるくらいだったら、アダルトグッズやアダルトビデオの方がはるかに気楽と思ってしまうのだろう。これはこれで構わない。セックスだけが人間の人生じゃないのだから。セックスレスを社会問題とするのではなく、その人の個性、その人の生き方にする世の中にすることがこれからのテーマなのだ！